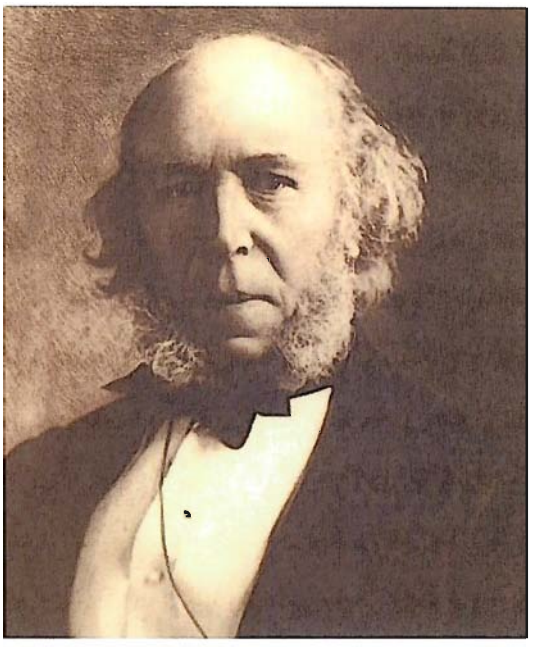
特集　ラフカディオ・ハーン

ハーン没後100年

福澤　清

ハーン Lafcadio Hearn（1850-1904）がスペンサー Herbert Spencer（1820-1903）の著書『社会学原理』*Principles of Sociology* 3 vols., 1876-1882（明治 9-15）と出会ったのは1882年のことで、著作を通じその生涯における崇拝の対象と見做すようになるのは、1885年７月『第一原理』*First Principles*, 1862 読破後のこととされている。読み終えたその日からハーンにとって全く新しい知的生活が開けた、という。

スペンサーは、ダーウイン Charles Darwin（1809-1882）やその弟子ハックスレー Thomas Huxley（1825-1895）などにより提唱され一世を風靡した「進化論」という一大思想に基づいて、世界・社会・人生などすべてを体系化し説明しようと試みる。（但し、ダーウイン自身は、この点について迷惑がっている。）



ハーバート・スペンサー

これはハーンのアメリカ時代における出会いであるが、ハーン最期の著書で彼のジャパノロジストとしての地位を不動のものにした大著『神国日本』*Japan : An Attempt at Interpretation,* 1904 の中にはスペンサーへの言及が至る所で散見される。

ハーンはスペンサーの理論的枠組みの中で日本や日本文化に関する議論を展開し日本理解を深めていった、ということである。

たとえば「祖先崇拝の進化の歴史」の一環としての「日本の祭りの歴史」も、スペンサーの主張する「宗教発達の法則」を支持する事例のひとつとして挙げられる。古代の祖先崇拝は「あらゆる宗教の根源」である、と見做す考え方である。

また「神道」に関する箇所でも、「宗教制度の社会に対する大きな価値は、集団に凝固力を与え、統治を強固にする点であり、社会学的に言えば、宗教の価値は、その宗教の保守精神にある」というスペンサーの考えを援用して議論を展開している。『神国日本』の中に、次のような記述がある。

「法律は、書いたものでも、書かれないものでも、どちらも生きている者の上に、死者の支配を公式に表したものである。過去の世代が、その持っていた肉体的・精神的な性質を伝えることによって、現代の上に働きかける力、――また、生活の慣習と様態とを残すことによって、過去が現在に働きかける力、この力に加えて、口から口に、あるいは文字によって受け継がれた、公民としての行為を定めた規則を通して、働きかける力がある。この真理が、黙々たる祖先崇拝を包含していることを示すために、私は、この真理を強調するのである。（中略）死者の手はなかなかに重く、今日でも、それは生きている者の上に重くのしかかっている。」

日本に初めて進化論を紹介した人物の中に、「国楽の創出と音楽教育の開拓」「吃音矯正事業の着手と発展」その他で多大なる業績を残した伊沢修二（1851-1917）がいる。彼が米国に留学していた頃、ダーウインの弟子ハックスレーが訪米したこともあって、スペンサーの「社会進化説（有機体説）」が米国で最盛期を迎えるが、その時にこの影響を受けたようである。彼の訳によるハックスレー著『生種原始論』(明治12年）という本が刊行されている。(渡米する前に中浜万次郎（1827-1898）に英語を習ったものの、現地での実生活には相当の戸惑いがあったようでもある)。

驚くべきことに明治の日本において、1877（明治10）年から約20年の間にスペンサーに関する翻訳書が30数冊も刊行されている。なぜ、このような異常とも言うべき事態が生じたのであろうか？

日本は当時、封建時代から近代国家形成への推移期である。アジアの周辺国家はヨーロッパ列強により植民地化されており、早急に強力な独立国家を形成する必要があった。

時の駐米公使森有礼（1847-1889）は、1873（明治６）年スペンサーと会い、伊藤博文（1841-1909）の命によって『大日本帝国憲法』の起草、さらにその英訳についても意見を求めている。

日本の伝統的歴史的状況の中で、森は、本来的意味での国民国家を形成するためには、いかにして国家と個人を結びつけるか、という課題があると考え、その課題を解決するための近代的理論としてスペンサー理論を参考にすべきである、と結論付けた。

その頃『社会学原理』第２巻第５部を執筆中であったスペンサーは、相談を受けて日本の歴史・文化に非常な興味を抱いた、という。

早急な近代国家創出に躍起となっていた日本[＝森]に対するスペンサーのアドバイスは、次のような内容である。

「新しい諸制度は連続性を破壊することを阻止するために、できるだけ現在の諸制度に接木されなければならない―新しいものによって古いものを取り換えるのではなく、古い形態を次第に大きな程度まで修正しなければならない。」(1892年8月23日付け書簡)

ハーンも『神国日本』の中に、スペンサーの『自伝』から次のように引用している。

「制度は国民性に依順するものである。制度の外見をいくら変えたところで、その本質は、国民性と同じく、そう急速に変わるものではない」

「宗教制度をにわかに変えると、政治上の制度の場合と同じで、後には必ず、反動がくる。」

他方、板垣退助（1837-1919）達はスペンサーの著書のひとつ『社会静学』*Social Statics*, 1851を「民権の教科書」、スペンサー自身を「民権の本尊」と見做していたとのことである。したがって、その著書は日本において予想を超える売れ行きとなった由である。(が、板垣とスペンサーの直接会談は不首尾に終わっている。)

1870（明治３）年、米国に赴く森有礼に外務省弁務少記として随行した外山正一（1848-1900）は、ミシガン大学において哲学と化学を修め、1876（明治９）年に化学科を卒業して帰国した後、開成学校における西洋史の講義でスペンサーを紹介し、その著書も用いた。

当時一緒に教壇に立ち、後に美術関係で有名になるフェノロサ Ernest Fenollosa（1853-1908）も政治学の基礎としてスペンサーの社会学を講義した。

このように、日本の大学で社会学、心理学、哲学（倫理学）の講義にスペンサーが取り上げられるようになったことも、日本におけるスペンサーブームを生み出す要因になったと思われる。

スペンサーの「進化」の観念が、例えば中国で魯迅 Lu Xin（1881-1936）にも影響を及ぼしたように、世界規模で受け入れられたのは、その考えが生物・地球の進化に留まらず、社会・国家（政府）・工業・商業（産業）・言語・文学・科学・芸術（美術・音楽）の発達／進化も含めて、継続的に単純から複雑な段階への同一の「進化」を含意させた点にある、と思われる。

それは、同質から異質なものへ進化する、という「万物の法則」が、宇宙・文明・社会など、あらゆるレベルで観察される、というものである。（因みに、「最適者の原理 Survival of the Fittest」という「自然淘汰」の用語はダーウインではなくスペンサーによる、と言われる。）

スペンサーの学説が明治日本の初期に歓迎されたもう一つの点は、進化論がキリスト教と対立する側面があるように思われたことであろう。

キリスト教嫌いであったハーンが祖先崇拝を美徳とする日本に好意的姿勢を示し、そのことに対し、スペンサー学説の「進化論」に基づく様々な説明を行っているのは、興味深い。

最後に。

主として19世紀後半という時期の同時代人としてスペンサー、ハーンそれにチェンバレンも加えてよいと思われるが、このうちの誰一人として正規の高等（大学）教育を受けていない。

にもかかわらず、著作や発言を通じての彼らの主張が大学人を筆頭とする知的階級の多くの人々に質・量ともに少なからず影響を与えた、ということは否定できない事実である。

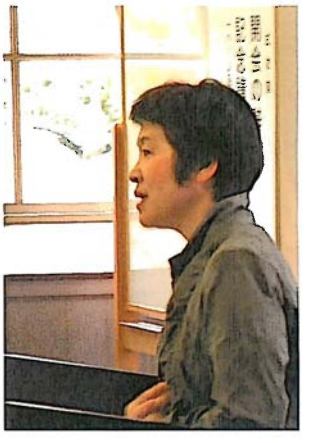
国立大学が独立法人化された21世紀の今日、「大学（教育）改革」はいかにあるべきか、という問いに思いを巡らす時、考えさせられるものがある。

＊ふくざわ　きよし
文学部教授

注：肖像写真は、The Warren J. Samuels Portrait Collection at Duke University. より引用。

ハーン没後100年祭
展示会・講演会 in 五高記念館を開催

10月13日（水）から10月28日（木）まで、黒髪キャンパスの五高記念館で、附属図書館と熊本大学学術資料調査研究推進室によって共催されました。13日は岩岡館長の挨拶の後、小泉八雲旧居館長宮崎啓子氏による特別講演「ハーン没後100年と小泉八雲旧居」が、また28日は教育学部教授西川盛雄氏による特別講演「ハーンの遺産」が、多数の受講者を迎えてハーンゆかりの講義室で行われました。



講演する宮崎館長